

「資料紹介」

図書館の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。

諏訪兼位著 裂ける大地——
アフリカ大地溝帯の謎 講談
社（選書メチエ） 1997年
256p.



アフリカを訪れる者は誰しも、その広大な大地に圧倒される。あくまでも広い空、どこまでも続く平原、とてつもなく太い河の流れ…。管理されていない自然の凄まじさとおのれの卑小さを実感し、われわれは爽やかな敗北感を覚えるのだ。

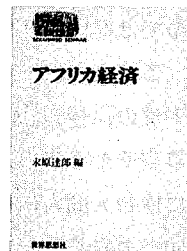
このアフリカの大地に科学のメスで迫ろうとするのが本書である。分析の対象は、ジブチからマラウイ、モザンビークに至る東アフリカ大地溝帯。ナイロビ近郊の「リフト・バレー」でその偉容に驚嘆された方も多いだろう。本書では、地質学、岩石学を専門として長年アフリカ大地溝帯の研究に携わってきた著者が、一般の読者を念頭に置いて、アフリカ大地溝帯の謎を解き明かしている。

日本におけるアフリカ研究の草創期からこの分野で活躍してきた著者の視野は、狭義の地質にとどまらず、火山や地震、鉱物資源の生成、砂漠化、さらには人類誕生の謎に至るまで広がりを見せている。本書には、確固とした専門に基づく視野の広がりが見事に散りばめられ、地球科学の奥行きを感じさせる。一般の読者にはやや難解な部分もあるが、この分野の基礎知識があれば猛烈におもしろいのではないだろうか。

評者としては、地球科学と社会科学の接点を感じられたのが、本書のおもしろさであった。自分には縁遠い学問と考えていた地球科学が、砂漠化や鉱物資源生成の問題など、社会科学にとって重要な問題を扱っており、それに対して明晰な解答を与えていることに驚かされた。アフリカにおけるさまざまな問題の解決のために諸学問分野の共同作業が必要となっている今日、本書のような碩学の手による入門書の価値はきわめて高いと言えよう。

（武内進一）

末原達郎編 アフリカ経済
京都 世界思想社 1998年
226p.



編者自身の構造調整“発見”
体験と、素直な驚きの吐露から
この本は始まる。「はしがき」と

序章を見る限り、構造調整政策とその影響の広がりぶりを解説することが本書の本来の目的であるようだ。

石油危機を転換点として経済学の思潮が変わり、経済学においては新自由主義が、政治においては新保守主義が台頭して、それはやがて開発経済学にも甚大な影響を及ぼした。旧来の開発論が解体されて開発経済学はオーソドクシーに回帰し、それに伴って登場した援助政策が構造調整型援助であった。それから永い歳月を経てすでに語り尽くされた感すらある構造調整であるが、なにか目新しい視点を本書に探してみると、「蟻の目の現実」（はしがき）を構造調整の文脈から解説したいという意欲と、構造調整政策が「アフリカにもたらした社会経済変動は、他の地域とは異なる歴史的意味をもっている」（序章）という想定であろう。

しかし、このふたつの視点は残念ながら展開されていない。第2、4、5、6章は編者の意図に従って書かれているが、そこにある記述は構造調整の一般的な、国別の説明である。その他の章は、少なくとも序章の問題設定からは遠い。アフリカにおける構造調整を論じるに際して言及しておくべき国（例えばザンビア。ちなみに同国が東アフリカの章と南部アフリカの章の両方に登場するのは不可解である）、事項（例えば1989年のECA『アフリカの代替案』、90年以降の展開（例えばグッド・ガバナンス）を丁寧に論じておけば、本書のメッセージのひとつになっているインフォーマル・セクターを包み込む余地が生まれたろう。

（平野克己）

宮本正興・松田素二編 新書
アフリカ史 講談社（現代新書） 1997年 596p.



人類誕生から21世紀まで、生態環境から現代の紛争まで、そして、村や王国といったローカルな舞台から、アフリカ大陸を取り巻く大洋に至るまで、サハラ以南アフリカの歴史の深みと広がりを読む者に伝えたいという意欲にあふれた書物である。そのこともさることながら、本書の出色は、「川世界」（第II部）と「外世界交渉」（第III部）という参照枠を提示し、歴史の再構成を試みている点である。ナイル川、ニジェール川、ザイル川、ザンベジ・リンポポ川というアフリカ5大河川の流域をとりあげ、それぞれに固有の地域形成の論理を追究する一方、サハラ砂漠、インド洋、大西洋という、ブラック・アフリカにとっての三方の「フロンティア」での交渉のありさまの記述を通して、アフリカの外延の遠大さも強調されている。ただ単に「アフリカ大陸で起こったこと」を扱うのではなく、地域が地域たるゆえんを探ろうとする姿勢は、厚みのある地域理解のために貴重である。

また、本書の持つもうひとつの意義は、新書という形態で刊行されたことではないか。16名という大規模な執筆陣、1000枚に及ぼうとするボリューム、そして多岐にわたりかつ高度な内容を持つこの仕事は、この低価格（1400円）で発行されたことには驚愕した。このボリュームであるなら索引がほしかった、とか、初学者・一般向けを考慮して文献案内があったら、とか望蜀の念もあるが、これはやむを得ないことだろう。本書についてはむしろ、新書という出版形態のもつ利点を最大限に活かし切ったと言いたい。

研究という仕事は、専門化し高度化するほど、専門家・一般を問わず市場（読み手）が縮小するという宿命を背負っている。英語や仏語で論文を書き、より大きな市場を相手にするならさておき、日本語でアフリカ研究を続けていく限り、日本という市場の問題は何らかの形で考えなければならないと思う。本書が市場からどういう受けとめられ方をするのか、関心をそそるところである。

（佐藤 章）

廣瀬昌平・若月利之編著 西
アフリカ・サバンナの生態
環境の修復と農村の再生 農
林統計協会 1997年 xxii +
484p.



近年の地球環境意識の高まり

は、農業資源・環境の劣化が人間生存の危機をもたらすとの視点を提供した。

本書もまた、こうした思潮の中から生まれた成果であり、第1章「西アフリカにおける地球環境問題と持続的農業の展望」に、その問題意識が表明されている。

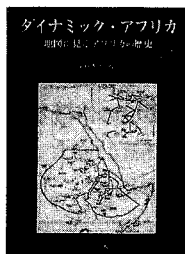
持続的農業システムとしての内陸小低地での水田稲作、これは著者らの再生戦略の出発点でもあった。その取り組みが展開された西アフリカについて自然科学による解析データを紹介したのが第2章「西アフリカの生態環境」である。以下三つの章にわたってナイジェリア中部のギニア（湿潤）サバンナ帯で実施された調査の内容が紹介されている。社会科学や人文科学にもまたがる調査報告は、「伝統的農業と作物生産」「土地制度と森林資源」「牧畜活動」というテーマでまとめられており、それぞれに興味深い。

しかしながら本書の真骨頂は続く第6章であろう。

「生態環境の修復と農村の再生のためのオンファーム実証研究」と題して著者らによる年来の取り組みが紹介されている。ところが、調査村でのオンファーム実証試験について、現地側に評価を依頼した結果、プロジェクトの根幹である水田開発に対して厳しい評価を受けた。著者らはこれを真摯に受け止めた上で、まとめの第7章「サバンナ集水域の環境保全型総合農業開発にむけて」を展開している。

学術研究に限らず、調査報告書には無味乾燥なものが少なくない。その一つの原因は、大半の報告が調査する側の見解のみを書き連ね、被調査者の声を顧みることがなかったからではないか。主体が誰であるのかを明確に意識した作業、この一点においてだけでも本書は一読に値する。ちなみに本書は昨年、第1回「国際開発研究大来賞」を授与されている。（望月克哉）

M・クワメナ・ポー、J・トッシュ、R・ワーラー、M・ティディ著 保科秀明監訳 ダイナミック・アフリカ——地図に見るアフリカの歴史 東京古今書院 1997年 88p.



地味ながら貴重な本が翻訳出版された。

本書は8世紀から1980年までの時代・地域別の36章からなっている。各章は見開き2ページで構成されており、テーマ地図と解説文を照らし合わせることで、アフリカのある地域のある時代が視覚的にとらえられる仕掛けになっている。合計38枚の地図の特徴は、ヒトとモノの移動のダイナミズムが描き込まれていることである。すなわち、ただ単にある時代の民族や王国などの配置を切り取ってくるのではなく、諸王国の栄枯盛衰、海陸の交易ルート、探検家や宣教団の足どりと植民地拡大のプロセスなどが豊富に盛り込まれている。

「動き」を描くにはやむを得ないことであるが、しばしば多くの種類の矢印が1枚の地図上に交錯しているために、視覚化の長所であるわかりやすさが犠牲になっている面がある。また、日本で馴染みの少ない固有名詞を散りばめながら、1ページに収めるには過多とも思える情報量を詰め込んだ世界史の教科書風の解説文だけでは、正直に言って頭のなかにすっと入ってこない(「ですます」調の平易な文体で訳されているものの)。しかし、解説文および凡例にとらめっこしながら、丁寧に地図をたどることによって、アフリカの歴史のダイナミズムが具体的なイメージをもって迫ってくる。ぜひ1枚1枚の地図を時間をかけて「読んで」みていただきたいと思う。

(牧野久美子)

島泰三著 どくとるアイアイと謎の島マダガスカル (上)
(下) 東京 八月書館 1997年 301, 326p.

島といっても日本よりはるかに大きいマダガスカル、アジア的なアフリカの国ということでもめずらしいが、この島は6500万年前から地球の他の部分から隔絶されて、独特の自然を育んできた点でも注目すべきところだ。

大学理学部を卒業して、テレビの動物クイズ番組の企画のため、マダガスカルでアイアイを探す仕事をつかんでその島に渡った著者は、その後も原猿類とくにレムールの研究者、国際協力事業団(JICA)派遣の協力専門家、国立チンバザ公園のレムール類特別研究チームリーダーとして、10数年その島に腰を据えることになる。アイアイはどんな性質で、何を常食し、どこに分布しているのか。また伝説となっているジャイアント・アイアイは、もしかしたら、いまでもマダガスカルのどこかに生き続けているのではないのか。この疑問に突き動かされて、島中に旅を続ける。

“関東平野ほどの広さの森林地帯、そこに道路が一本通っているだけのような” 広大な地域、奇岩の峰が続く山地、アンモナイトの川原、化石木の谷、巨大バオバブの原など、マダガスカルの自然は不思議の連続。ドクトル・タイゾーという愉快で献身的なガイドを得て、この世のワンダーランドを歩く体験はぜいたくだ。また写真より写実的であたたかみのあるさし絵の助けで、珍しい動物や植物、ごく自然体で生きているような人々と出会うことができる。

アイアイを求めて島を巡る著者の胸のうちには、この生物の宝庫の将来への不安が広がってゆく。自身の生物学的研究を通して実態を明らかにするだけでなく、環境破壊を止めるために国際的チームによる「緑の国勢調査」を思い描く著者は、この本の中でもう独りでそれを始めているようだ。

(丹埜靖子)

